

## 次世代の動脈硬化研究を担う若者たちの集い—領域を超えた交流による新たな展開—

**A Gathering of Young Generation for Future Atherosclerosis Research—New Development  
by Interactions among Young Researchers in Different Fields—**

上田 窓

Madoka UEDA

*Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Chiba University,  
1-8-1 Inohana, Chuou-ku, Chiba 260-8675, Japan*

心疾患、脳卒中は、悪性新生物とともに日本では三大死因であり、その対策は極めて重要なものとなっている。動脈硬化はこれら心疾患及び脳血管疾患の基礎病変として重要であり、その予防と治療に寄与する薬学研究の学際的な展開が求められている。また、動脈硬化病変は極めて複雑なメカニズムで進展することが知られている。すなわち、この病変には液性因子としてアディポネクチン、細胞増殖因子/サイトカイン、血液凝固因子などが関与し、細胞成分である脂肪細胞、内皮細胞、血管平滑筋細胞、マクロファージなどの機能調節に異常が起こっており、その結果としての細胞外マトリックスの顕著な変化も観察され、さらに肥満や脂質代謝異常が病変進展の基盤となっている。

現在、薬学ではこれらのメカニズムに対する基礎研究や新薬開発のための研究が活発に行われている。また、生活習慣病の1つである動脈硬化症は公衆衛生における疾病の予防という観点から非常に重要である。そして、動脈硬化症は脳梗塞・心不全などの重篤な疾病を起こす危険因子であり、治療に多くの時間と労力の傾けられている分野である。

本シンポジウム、日本薬学会第127年会「次世代の動脈硬化研究を担う若者たちの集い—領域を超えた交流による新たな展開—」が開催されるきっかけとなったのは、昨年（平成18年）の6月に動脈硬化研究の各方面で活躍する先生方によって行われた「北陸大学学術フロンティア・サテライト・ミーテ

ィング—薬学における動脈硬化研究の新展開—」の開催である。そこでわれわれは、普段接していない研究内容、最新の動脈硬化研究に触れて学問的に大きな刺激を受けると同時に、これまで薬学において動脈硬化関連の研究の情報交換が必ずしも十分でなかったことも知った。

われわれ院生にとって動脈硬化症を様々な切り口から考えること、また自分たちが主体となり動脈硬化研究の現状を学び意見を交わすことは、動脈硬化研究の視野を広げることにもなり、近い将来、研究者としてあるいは医療人として活躍する上で大きな糧となると考えられる。そこで、指導研究室の先生方のご支援の下、研究情報の交換を活発に行い、薬学の動脈硬化研究を活性化することを目的として、普段はあまり交流のない基礎薬学・衛生薬学・医療薬学に属する大学院生が意見を交わす場として動脈硬化をキーワードに日本薬学会第127年會に集まった。

6名のシンポジストによる各講演は発表15分、質疑応答3分、計18分で行われた。本シンポジウムには50名ほどの先生方・院生が出席し、院生からも多くの質疑がなされ、活発な討論が繰り広げられた。同じ動脈硬化研究というテーマではあるが、脂質代謝、動脈硬化症の発症から進展に至るまでの様々なプロセスについて研究されていることを改めて感じた。また、他研究室の研究への取り組みを垣間みることができ感化を受けた。本シンポジウムは「動脈硬化」をキーワードに院生が一堂に介し討論を行う初めての試みだったが、院生がさらに視野を広げて動脈硬化研究にアプローチできるようになること、またシンポジウム後の交流からも新しい展開

が生まれていくことが予想された。今後もこのようなシンポジウムが開催され、動脈硬化研究の発展に寄与することを期待する。

本誌の誌上シンポジウムに参加した各シンポジストの発表概略を以下に示す。名古屋市立大学大学院の大野雅恵氏には「コレステロール代謝に関わる核内受容体 FXR の解析」、千葉大学大学院の秋里圭恵氏には「マクロファージのコレステロール代謝における pitavastatin の影響」、北陸大学の浦野晶子氏には「動脈硬化進展の鍵分子プロテオグリカン—その特性及び合成調節—」、京都薬科大学の高橋稔氏には「低酸素が誘導する血管平滑筋細胞遊走因子

としてのトロンボスポンジン-1 の作用機構」、星薬科大学の斉藤英治氏には「Mönckeberg 型動脈硬化症における細胞外マトリックスの発現変動と骨粗鬆症治療薬の影響」という題目で講演頂いた。また、誌上シンポジウムへの掲載はないが東京大学の西村多喜氏には「動物細胞を用いたオキシステロール結合タンパク質 (OSBP) の機能解析」という題目で講演頂いた。

最後に、この場をかりて院生シンポジウム開催に当たりご尽力くださった院生の方々、またご支援賜った所属研究室の先生方に心よりお礼申し上げます。